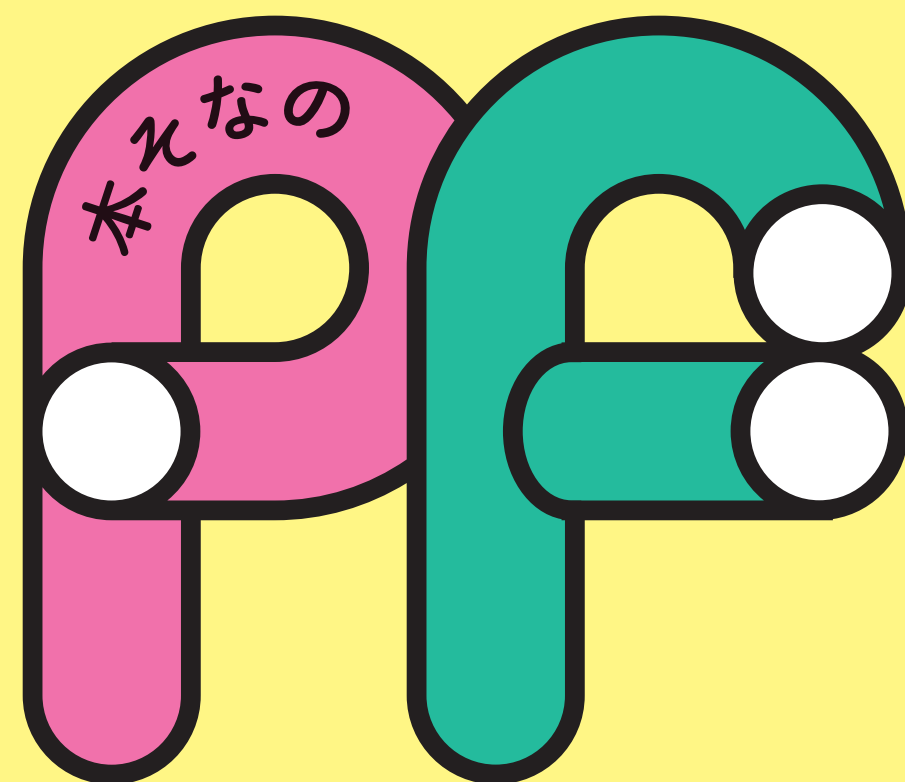


これからの久留米の防災のカタチ



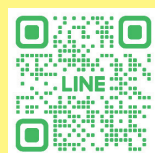
OUR/ PHASE FREE/ COMMUNITY

「本業+α」×「そなえるくるめ」合同事務局

「本業+α」×「そなえるくるめ」合同事務局（みんなのサロンSORA内）
久留米市津福本町116-44
TEL/FAX 0942-34-9830 MOBILE 090-8347-1243（江口） MAIL alpha2platform@gmail.com

本冊子は、令和5年度久留米市市民活動・絆づくり推進事業補助金の助成を受けて制作されています。

発行年月：令和6年3月31日 制作発行人：「本業+α」×「そなえるくるめ」合同事務局



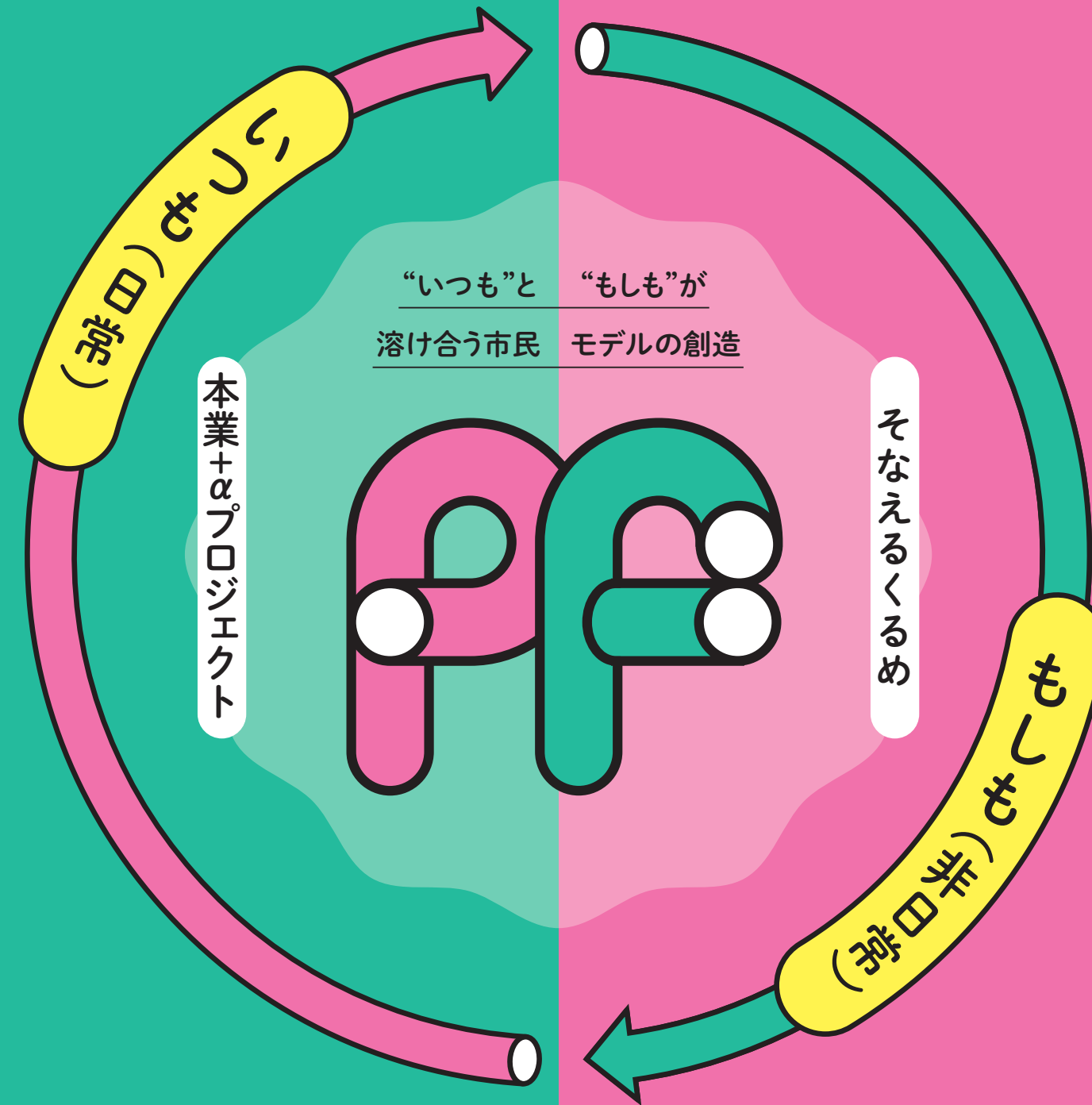
OUR/PHASE FREE/COMMUNITY

はじめに

私たち、本業+α×そなえるくるめ合同事務局（通称：「本そな」）は、2022年から「フェーズフリー」をコンセプトに活動を展開して現在2年目をむかえる。

「フェーズフリー」とは、“いつも（日常）”や“もしも（非常時）”のフェーズ（社会の状態）にかかわらず、すべての人の適切な生活の質を確保しようとする考え方である。災害など“もしも”が起きると、人々の間で一時的に防災意識は高まるものの、“いつも”の生活に追われ、備えを十分に行えないまま、しばらくすると再び“もしも”がやってくる。これまで何度も繰り返されてきたジレンマだ。こうした事態に対処するため、“いつも（日常）”と“もしも（非常時）”の垣根を取り払い、問題解決にあたらうとするアプローチがフェーズフリーだ。

それではなぜ私たちが「フェーズフリー」をコンセプトに活動をしてい



るのか。日常を豊かにする活動が非常時に備え、そのあり方を変化させること、これまで災害・防災を中心に行ってきた活動と日常を豊かにする活動が掛け合わされること、そして両者が共にバージョンアップすること。つまり、久留米の中で「“いつも”と“もしも”がお互いに影響し合う市民モデル」を新たに作りたいと考えているからだ。このような活動をはじめた矢先、2023年7月に九州北部地方を中心に記録的な大雨に見舞われ、久留米でも甚大な被害が発生した。おそらく今後も災害は多発するだろう。もちろん、私たちの活動は、現時点で、“いつも（日常）”と“もしも（非常時）”の垣根が完全に取り払われた段階にまで至っていない。ただし、その垣根をちょっぴり越えられたところがいくつか生まれている。今後、この「フェーズフリー」の活動を共に実践する人が少しでも増えることを願いつつ、私たちがこの1年間で取り組んだり、気づいたりしたことをみなさんと共有したい。

本業+αプロジェクト × そなえるくるめ これまでの歩み

私たちは「本業+αプロジェクト」と「そなえるくるめ」という2つの団体が合同事務局体制を取るかたちで活動を行っている。“いつも（日常）”と“もしも（非常時）”の活動がお互いに影響し合うことで、それぞれの団体や取組、意識が変わっていく。ここでは、それぞれの団体の概要と共に、これまでの活動が2023年度の活動にどのようにつながっていったのかを紹介したい。

本業+αプロジェクトとは？

「本業+αプロジェクト」は、“本業（商売）”を営みながら、お店の店主などが、地域やお知り合いの「困った」「やってみたい」の声をひろい、“+α”の取組につなげる久留米発の地域プロジェクトである。2019年から本格的に活動をスタートし、現在、現在のプロジェクトには約35拠点以上が参加している。

厚生労働省「保健福祉分野における民間活力を活用した社会的事業の開発・普及のための環整備事業」をきっかけに活動がスタート。

本業+αプロジェクト事務局と久留米市子ども子育てサポートセンターと協働で、地域で見守る体制整備事業を行い、地域に眠る資源発掘を実施。活動に賛同した久留米市内の異業種からなる16拠点が加盟。



子育て世帯向けのパンフレットを作成し、久留米市役所や市内のコミュニティセンターなどに配布、周知を実施。各コミュニティ拠点ではコロナワクチン接種予約のサポートを行う。



いつも 側の活動

2019年度

2020年度

2021年度

もしも 側の活動

2021年度

2022年度

そなえるくるめとは？

「そなえるくるめ」は、コロナの第5波の中、久留米で豪雨災害が起きた際、「行政がやってくれるだろう」という受け身ではなく、お互いの知恵とチカラを合わせて、天災やコロナなど困難な状況を、自分たちができることをシェアし、みんなで支え合いながら乗り越えていく！そんな久留米を目指して2021年に設立した団体。

社会福祉法人やコロナ陽性体験者が自主コロナ対策の意見交換をはじめ。コロナの防疫グッズの配布準備を開始。



久留米市より3回目、4回目のワクチン接種のインターネット予約代行の依頼を受託。

いつも と もしも が
掛け合わされた活動

「本業+α」×「そなえるくるめ」合同事務局が発足。「フェーズフリー」をコンセプトに掲げて、協働体制のもと、研究などの開催、『本業+αのトリセツ』などを発行。





土砂災害で家財道具を何もかも失った田主丸竹野地区の夫婦(写真右2人)がAさん(写真左)の人脈で集めた洗濯機やテレビなどを受け取りに。

自分の、みんなの、「いつも」の力を バージョンアップして、踏み込もう。

2023年、「地球沸騰化の時代」との警告、そして7月の久留米市豪雨災害、2024年1月の能登半島地震。命や財産を奪うような大災害が頻発すると、「もしも」が当たり前、対岸の火事ではなくなる。だが、いざ災害支援となれば「泥かき」などの重労働を想像するのか、支援者は人員不足。炊き出しや片付けといった支援もあるのに、踏み込もうとしないのは我が事に捉えきれていないからだ。

2023年7月の豪雨災害、その直後から「令和5年7月豪雨久留米連携会議」が週1回開かれ、「本そな」も参加。被災者から要望のあった「エアコン」「中型冷蔵庫」「パソコン」などの品目を久留米官民協働100人(※注)のLINEに流すと、「本業+α」のAさんらが応えた。地域の共助力を高めようと活動する彼らは、発信力やコーディネート力を活かしてLINEを利用、「引越しする人がいてエアコンがある」との情報をつかみ、早々に集めた。行

動力のある人からは「被災者に届けること。できるかも」との申し出も。我が事として「いつも」の自分をもう一段引き上げて、踏み込もうとしていると実感した。もちろん、駆け付けるとなると線状降水帯による雨の中、あるいは余震が続く中、冠水、でこぼこの道を進むのだから、勇気だけでなく悪路を走破する運転技術や貫徹する力も必要となる。

「踏み込む力」の最初の一步は、自分の力を自覚し、「もしも」を意識しながら「いつも」の生活をバージョンアップしていくことだ。例えば、「料理はまあできる。友人らを誘って炊き出しに挑戦」「四駆を運転してみる」「冬季にキャンプを。氷点下対応の寝袋を使う」など。「本そな」の活動もさらに進化させて、「炊き出し」「キャンプ」などの企画実施に取り組んでいきたい。

(社会福祉法人拓く 馬場篤子)

※注 … 久留米官民協働コンソーシアムのLINEグループ。登録者は140人。能登半島地震の際、情報共有で役立った。同団体は官民の多様なメンバーで構成され、社会的活動の推進を目的に研修や実践をしている。



1月上旬、ライフラインがない中、外部の支援者を受け入れるために、珠洲市の街中に災害支援拠点を整備。震災で破壊された壁にベニア板を貼り付ける(写真左:暮らしくりネットワーク北芝・池谷氏、写真右:NPO法人YNF・江崎氏)。

「もしも」の時に、「受け止める力」が すぐに起動するように。

テーマの「受け止める力」は、単に受け入れる、「受容する」の語意とは区別して、被災者が支援者とコミュニケーションをとり、逆に支えて応援する力と捉えている。被災地によそから踏み込む場合、現地の被災者や支援者の中に、この「受け止める力」、つまり「受け止められる人」が必要だ。

2011年3月11日、東日本大震災。28日、仙台市に入ったものの被災経験のない私に、現地のNPO法人CLCさんが移動手段も宿泊先も食事も確保。思いを受け止めてくれたことで、すぐ支援活動に集中できた。それから5月、原発事故によって甚大な被害を受けた福島県南相馬市や浪江町にある精神障害のNPO法人あさがおとNPO法人コーヒータムの2事業所が、寝泊りできる場を提供。利用者、職員は被災したが、事業活動を続けながら私たちを送り出す、彼らの力を思い知った。また、能登半島地震でも、当法人の職員らは大勢の「受け止められる人」に助けられている。その一人はNPO法人暮らしくりネット

ワーク北芝(大阪府)の池谷さん。被災から10日後、彼の車に同乗して陥没した雪道を急ぎ、彼の的確な指示によって支援活動ができた。

もちろん、被災後は誰もが失望、混乱のさなか。支援される側にいながら、初対面の相手の背中を押そうと支援する側に回るのだから、前向きに考えられる力が相当求められる。「もしも」久留米がさらなる災害に見舞われたとき、「いつも」の私たちが、このような「受け止める力」をできるかぎりすみやかに起動させられたらと思う。「受け止められる人」の育成、「受け入れる場」の整備が差し迫った課題だ。今後も被災地で出会った皆さんを招へいしながら、「受け止める力」を自分自身に問いかけていきたい。

私たちも本業を続けながら、「いつも」の人的ネットワークをすぐ駆使し、後方支援や直接支援と同時に外部からの支援者を受け入れていきたいと思う。
(社会福祉法人拓く 馬場篤子)



凍える寒さの中、能登被災地で100以上の焼きそば焼き。
料理は大の苦手なBさんだが、120パーセントの力で笑顔と焼きそばを提供。

「コーディネートする力」を発揮するには、 「いつも」の多様な関係性が大切。

「本業+α」の事業では、年齢や職業、国籍、障害などが異なる人たちと関わり、常に相手の個性を活かしながらつながろうと努めている。「もしも」のとき、多様な方々にしなやかで多様な支援を届けたり、人をつないだりしてコーディネートできる市民が必要と思うからだ。

2024年1月、能登半島地震。早く駆け付けたいが、石川県内の幹線道路は各地で寸断。支援活動を思えば自動車で向かうしかないが、遠距離の運転に自信がない。ミュージシャンのBさんが浮かんだ。福祉畑の私とは違い、自由な発想、型にはまらない人物だから、多様な被災者の心にすんなり入りこめそう。日頃、「イベントの企画、お願い」と急に頼んでも、「いいですよ」と二つ返事。「奥能登へ、一緒に行かない?」、これも「ぼくも行きなかった。雪道でトラックを運転した経験があるよ」と即答。1月29日に出発し、現地の被災者や支援者と協力して100食以上の炊き出し、さらには公衆浴場の無料開放に並んだ車列の整理で駐車場係もこなす。疲れているのに被災者

にも支援者にも明るく声を掛け、気持ちをなごませてその場を盛り上げていく。多様な人との関わりを広げながら、相手の「好き」を好きになり、その人を輝かすように努めている「いつも」の彼ゆえではあるが、「もしも」の現地でも心強いコーディネート役を発揮した。

2年前より、「本業+α」と「そなえるくるめ」は互いの取り組みを掛け合わせたことで相乗効果生まれ、「もしも」のときにコーディネートできる人材が育っている。今後、災害支援や生活支援などの研修を重ねることで、各自が持ち味や仕事を活かしながら、課題や困難さに対応できる「市民コーディネーター」が誕生すると思う。
(社会福祉法人拓く 馬場篤子)

コラム

民民協働がもたらす 官民協働のバージョンアップ

久留米の得意技である「掛け合わせ」が、いよいよ「いつも」と「もしも」との融合にたどり着き、成果を生み出し始めている。そこに求められた「踏み込む力」、「受け止める力」、「コーディネートする力」が試行錯誤を繰り返しながら、段取りよく展開できている。そのための秘訣には、もう1つのチカラである、「事務局力」が作用していると確信する。「本業+α」×「そなえる久留米」合同事務局による実績なのである。

久留米市は、市町村が創意工夫をもって包括的な支援体制を円滑に構築・実践できる仕組みに相当する重層的支援体制整備事業を2021度から開始した。高齢・障害・子ども・困窮の4分野の関係機関などが重なり合い、支援基盤を整えてきたが、その基盤は「フォーマル」な組織を中心とした構成で、市内で活躍する多くの活動者や住民同士の支え合いの動きといった「インフォーマルな力」を十分に組み合わせることができていなかった。そこで、フォーマルとインフォーマルがつながる官民協

働のプロジェクトに着手し、所管する地域福祉課は成果を生み出している。実は、それらのプロジェクトの運営が持続し、発展している理由に、民民協働の自由な編成がある。文字通り、民民のかけ合わせであり、それらを起動させているのが事務局力だ。

民民協働の事務局力は、官民で作られる連携会議に多くの工夫や大胆な発想を持ち込む。その結果、行政にとっての連携会議のわずらわしさは増えるものの、結果的には行政負担が軽減される。「いつも」と「もしも」のフェーズフリーは、今後ますます求められる官と民のフェーズフリーを促進する。そして、災害時に問題となる行政職員の抱え込みによる疲弊を緩和し、長期におよぶ復興への対応を可能にするものである。フェーズフリーの官民協働の波及先には、復興を含め新たな課題に対応するフェーズフリーなコミュニティの形成が拡がる。



平野 隆之 日本福祉大学

日本福祉大学大学院特任教授。地域福祉研究の立場から、重層的支援体制整備のフィールドワークを行っている。久留米市の官民協働プロジェクトとの出会いから、研究の新たな拡がりが生み出されている。地域のモヤモヤから生まれる新たな「掛け合わせ」(ワクワク)から多くの刺激を受けている。

本そなで取り組んだこと 家電製品等のマッチング＆「お茶っこ」

令和5年7月、久留米市で大規模な水害が発生。自分たちのコミュニティを利用した SNS での呼びかけからスムーズに拡散できた。それを受けて地域連携会議との共有から何が必要かが明確になり、結果的に被災された約30世帯へ家電や洋服等を届けることができた。日頃から培われていた「いつも」の関係性（本業+α）が「もしも」（そなえるくめ、NPO 法人 YNF 等）の場合にも活かされた事例になった。「もしも」を主体とした団体と繋がることで、いつもの関係性に、自分事として平常時から備える意識が向上し、個人レベルから官民協働へと変化し、その関係性が深まってきた。

家電製品等のマッチング コミュニティから被災者の手元へ、 私にできる「本業+α」

災害は、どんな時でも突然やってくる。日頃から備えていなければ、緊急時の早急な対応は厳しいものになる。本業を営みながら、そのコミュニティを利用して様々な発信（グループラインやインスタ等）をしている日常があったからこそ、呼びかけも迅速に拡散できた。「業務でディスプレイに使用した家具が提供できます」、「家電や物資を提供させていただきます」の声が早急に上がってきたり、直接現地までの運搬を請け負ってくださる方等、様々な「出来ること」が迅速に集まった。日頃から培われた信頼関係こそが、結果的に功を奏したのだと実感している。



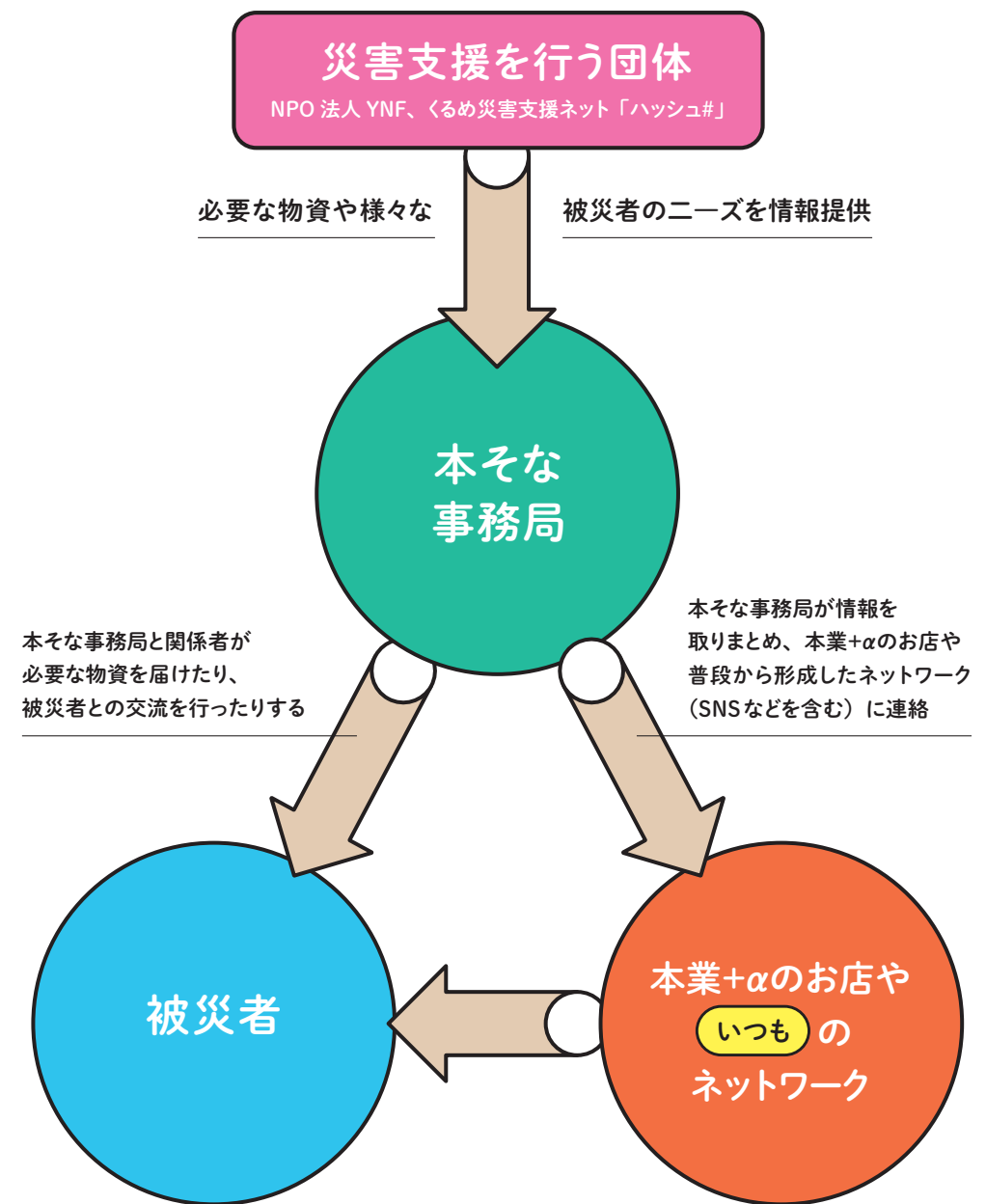
「お茶っこ」でほっこり会話が弾む

2回目の物資運搬の際「支援する人」「支援される人」という空気の流れが居心地の悪さを感じ、そこからスタートしたのが「お茶っこ」のはじまり。3回目以降は家電製品の運搬が終われば、手作りの漬物にアツアツ蒸したてのさつま芋!など持寄りものでおしゃべりタイムに花が咲く。

「お茶っこ」という空間は、コミュニケーションの場として、悲しみや希望を共有する場、さらに癒しをもたらす場へと変化し続けて、今は災害物資の配布拠点としても機能を発揮している。

私たちができる+αから生まれたマッチングの新しい形

いつもともしものフェーズフリー



久留米水害の被災者への物資支援と戸別訪問

法人の活動としては義援金や情報収集ぐらいだったのが、「そなえるくるめ」を通して支援物資の協力が可能となった。公式ラインやSNSを活用し具体的に必要な物資の協力を呼びかけることで、情報が地域内外に広がり、必要な物が必要な人に届く喜びを体験した。「NPO法人YNF」との戸別訪問では、被災者の方々と時間をかけて信頼関係を作りながら支援を続けることの大切さを学んだ。久留米には個性的な活動団体が沢山あるので、協力し合いながら「いつも・もしも」の意識改革を継続していけば次世代への恩送りになると信じている。



音成 玲子
一般財団法人やさしい街



必要な物資を届けに行った集積場所(森山公民館)で、エリアのお世話をされている被災者の方とお話



畠中 茂生
くるめ災害支援ネット「ハッシュ#」



床上浸水支援(床 壁の解体と泥出し、消毒、床張り、漆喰塗りなど)

課題解決より「楽しい」が1つでも増えたほうが前進

予定時間30分の訪問が1時間~2時間に為る事も多い。数を追えば、必ず落ちこぼれる人が出てくる。1対1の関係性を大切に1歩2歩と踏み込んだ関係性を創ってきた。「絆」や「関係性」とは、常に相手と自分の中で変化し続け、危うさも持ち合わせていて慎重さも求められる。私達は「支援」という認識を「課題を解決すること」と捉えがちだが「お互いの願いを叶える」という視点で取り組むことで、お互いの意思が活かされる。



本業+αのお店やその他の組織が被災地 支援に取り組んで考えたこと、感じたこと



災害で得られたもの

7月の水害は、大きな被害を被りましたがそれ以上に人との繋がりから生まれた人脈の宝を受け取らせてもらった。災害が起こる前の心得や予備知識は、防災という観点からはとても重要だが、平常時から繋がりあえる関係性こそが、災害時に力を発揮する。「もしも」と「いつも」が日常になることの大切さを痛感した。写真は、しめ縄作り。災害で繋がった方々と一緒に来年の繁栄を誓いながら今年の締めくくりをさせて頂いた。



田中 大輔
百笑倶楽部



今年の干支の注連飾り「登り龍」



渡辺 里実
自営業
(インテリアコーディネーター)



2回目の訪問時に奥様と一緒に。この時も偶然お客様から処分予定のソファとテーブルを譲りうけ、お届けできました。

偶然が重なって動けたボランティア

不用になった家具類を処分に出かけようとしていた時に、偶然グループラインで被災者の方が自分が捨てようとしている物を必要としていることを知り、連絡したのが今回の活動のきっかけです。物品の集荷・運搬に苦勞されていたので、主人と一緒に直接被災者の方へお届けしました。被災者の方が何に困っているのかを直接見聞することができ、想像以上に日常を取り戻すのに時間を要する事、継続的な支援の大切さを知りました。

被災地の戸別訪問調査

戸別訪問調査の概要・経緯

災害に関連する戸別訪問調査とは、被災している可能性がある住居や避難先に訪問し、被災者のニーズを把握し、生活再建の支援をするための調査です。公的支援制度が複雑多岐にわたっていることや被災者が孤立していて情報が入ってこなかったり、地域の自治組織に頼ろうとしなかったりすることから、被災者やその周辺地域からの要請を待たないで、こちらから訪問する形になっています。今回当団体が参加した個別訪問は、NPO 法人 YNF（以後「YNF」と表記）が主催しているもので、久留米連携会議で信頼関係が構築された民間団体です。久留米市において個別訪問は、行政や久留米市災害ボランティアセンター（以後「災害 VC」と表記）などによって行われていますが、災害ボラン

ティアセンター閉鎖後に、改めて、その後の状況確認と生活再建の支援につなげるために、災害 VC とくめ災害支援ネットハッシュ（以後「ハッシュ」と表記）は、災害 VC を活用した被災者を対象にして、YNF は、それ以外の被災想定地域を対象にして実施しました。訪問してみると支援からもれているケース、支援制度（公費解体、応急修理制度など）の対象になることを分かっていなかったり、入院していたり、家族が亡くなられたりして、申請を後回し、あるいは、申請する気力を失っているケースが、まだまだありました。また、公的支援制度が活用できないケースもあり、家屋の修繕などは YNF が、家電家具の支援などを当団体やハッシュなどが実施しました。（松田光司）



戸別訪問時に自分自身の入院・配偶者の死が重なって、応急修理制度を活用する気力を失っていた方を支援したケース。申請書作成のアドバイスと担当課と建設会社への繋ぎ、その制度で活用できる予算を越えた修繕費になったので、手出し 0 にする為に、建設会社とボランティアの共同修繕作業で人件費を低くして対応。



リアルな現状把握と信頼関係の大切さ

江口 掌花

2023年7月に久留米市で大きな水害が発生した。即座に流れる報道もそうだが、情報だけのイメージでは体温が伝わってこないというのが現状だ。そんな時こそ、現地に赴くことで得られる情報は、温かみを帯びていて自分事として捉えることができたし、より親密な関係性を生んだのではないかと感じた。非日常と日常を行ったり来たりするコーディネーターの存在こそとても重要なのではないかと感じた。日頃から災害への備えとして、自分にできる事を整理して、いつもの日常に落とし込んでいくことも大切なんだと思った。



物品の仕分けの様子



現地の声に耳を傾けて

村谷 純子

被災地訪問は地域の人と話さないとわからないこともたくさんあり、テレビで語られている部分も確かに被災地の一面でもあるが、復興の裏にはたくさんの苦労があることを痛感。また1度だけでは関係性を作る事は難しく、何度も訪問し関係性も高め合っている。生の声を聞いたことにより、元日におきた能登半島地震では、速やかに男女着替え一式を100セット準備し、チーム力で買出し、仕分け、運搬などを分業し届ける事が出来た。今後の「もしも」の為にとも関係性を深め、広げるなど、暮らしのアップデート出来たらと思う。



男女着替え一式を 100 セット準備

久留米連携会議

きめ細かい連携と支援に繋がる 「令和5年7月豪雨久留米連携会議」

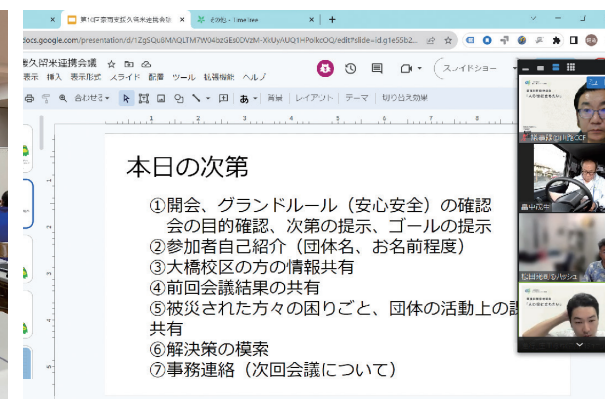
きめ細かい連携と支援に繋がる「令和5年7月豪雨久留米連携会議」

福岡県で大きな災害が起こった時に様々な会議が開催されます。民間主導の会議として、私が幹事をしている災害支援ふくおか広域ネットワーク（Fネット）が主催する福岡県情報共有会議があります。こちらは、全国の災害関連民間団体、行政機関、各地の社会福祉協議会から多数参加があり、オンライン会議で100名を超えてしまう場合があります。また、災害直後は、専門的な話が多く、福岡県全体をカバーするような会議になっているので、災害対応以外の活動をしている団体や個人が参加しにくいという声が多々ありました。そこで、今年度から、JVORD や筑後川コミュ

ニティー財団、YNF、ハッシュに協力して頂いて、久留米連携会議を立ち上げました。その結果、災害対応の団体だけでなく一般的な活動をしているボランティア団体・法人や個人（本団体、社会福祉法人拓く、被災地域の住民）の参加もありました。その結果、家屋の土砂出しだけでなく、被災者宅の個別訪問、家電家具支援、応急修理制度、農業ボランティアなどの公的支援制度の紹介などの動きが活発になった。この動きは、14から15ページに詳しく書かれています。（「本業+α」×「そなえるくるめ」副代表 松田光司）



対面会議



オンライン会議

地域防災会議

久留米の豪雨災害から 能登半島支援につながっていること

行政と市民団体が、分野を超えて災害のことを共に考えはじめた

久留米市介護福祉サービス事業者協議会が事務局となり、8月に第1回地域防災会議を開催。ネットワークの構築や災害時の迅速な情報共有の仕組みづくりを目的とし、行政7課と社協に加え、障害者基幹相談支援センター、包括支援センター、市民団体が集まった。被災した現場には、子どもから高齢者、障害者などさまざまな人が一斉に困難な状況になっており、それぞれに寄り添うには、多職種連携が必要であることを実感。情報を共有しながら、顔の見える関係づくりがはじまった。

1月の能登半島地震においては、「久留米官民協働コンソーシアム」のLINEグループに、上記のメンバーや全国各地で被災地支援を行っている方々も参画し、現地に支援に入った人からの情報共有や必要な支援物資を久留米から届ける活動など、それぞれが今できることを考え始めるきっかけとなっている。これらの活動は、自分たちにできること、遠く離れても我が事として考えていくことで今後発生する震災の備えにもつながっていく取り組みとなっている。



地域防災会議のつながりから、防災備蓄倉庫の設置検討について意見交換を行なった。

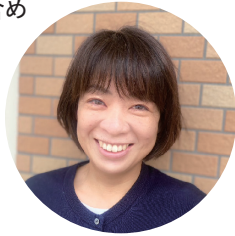
本年度の活動を通じて、どのような変化や気づき、 今後に向けたバージョンアップが起きたか

久留米水害や能登半島地震などの災害に関わる中で、各メンバーにどのような変化や気づきが生まれ、この経験を“いつも”と“もしも”における活動に結びつけていくのか。

北岡 さとみ

社会福祉法人拓く

被災された現地で声をきかせていただくと、自分の分野だけでは不十分であり、分野を超えて協力していく必要があることを実感。だからこそ、行政も含め高齢、障害、企業など分野をこえて日頃からの顔の見える関係をつくりたい。



江口 掌花

アトリエ fude-asobi
(本業+α×そなえるくるめ合同事務局)

書道教室アトリエfude-asobi、市民団体Percheを運営しながら活動を続けていく中で、自分のコミュニティから災害支援の呼びかけが迅速に拡散できた経緯を踏まえ、コミュニティの大切さ影響力の重大さを実感。



村谷 純子

みんなのサロン SORA
(本業+α×そなえるくるめ合同事務局)

みんなのサロン SORA として、美容とコミュニティサロンを経営。今回の試みが個々を結び、関係性を更に深めたように「いつも」の取組みを1つでも増やしたい。



音成 玲子

一般財団法人やさしい街

格差の少ない、人と自然にやさしい街の実現を目指し、共助・協働をコンセプトに主に心身の健康づくりと文化交流活動を行っている。本業も社会活動も互いに活かし合える仕組みができれば、地域の幸福度が上がると思う。



権藤 和尊

八百屋カフェ 農と音

素直になる事が一番大切で一番難しい事。物事を事実で受け止め真心で言動出来るような対話する関係が必要。



馬場 篤子

社会福祉法人拓く 理事長

久留米の豪雨災害、能登地震、災害直後に駆けつけたい。死に向かっていく隣人のもとに、駆け付けたい。「我がごと」として、「地域の一員」として、そして「今を生きる人」として、一緒に駆け付ける隣人ができたら、どんなにいいだろう。



浦川 直人

社会福祉法人拓く

能登地震支援の際、被災した福祉事業所の方が「たまたま地震の直前に備蓄品の確認しておいて本当に助かった…」と。“いつも”の事業活動に“もしも”のための避難訓練や備蓄と体験を来年度の事業計画の柱の1つにしました。



松田 光司

「本業+α」×「そなえるくるめ」、
くるめ災害支援ネット「ハッシュ#」

発災直後から被災地で調査、復旧活動、コーディネート、活動団体の連携促進を同時に行いました。本プロジェクトのお陰で、平常時に社会貢献活動をしている団体と連携して生活再建の支援活動もすることができました。



本冊子を読んでもくださった方々に、**いつも**と**もしも**の

フェーズフリーの重要性が伝わり、そうした活動が広がれたらなによりです